

[103] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10164>

出版情報：語文研究. 103, 2007-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

板坂耀子 著

『私のために戦うな』

本書の帯には、次の本文が抜粋されている。

私を本当に愛するのなら、私を守るのではなく、あなたが私を守らなくても、安心して私がいつでもどこでも自由に行けるような世の中を作ってください。そのような町を、国を、世界を作ってください。そのために戦って下さい。私は、自分を愛してくれた人たちにずっと、そう言いつづけて生きてきたような気がする。

それは、私一人を守り抜くことよりも、ずっと難しいことかもしれない。

それでも、それが、そんなに過大な要求だとは、私は決して思わない。

このように本書は、著者がこれまで感じていた女性としての生き方や価値観を、世間の非難や誤解を恐れずに、余すところ無く綴られたものである。構成は以下の通り。

はじめに

赤毛のアンの世界

第一章 洗い、片づけ、捨てることとは

第二章 ひとりりで生きる、みんなと生きる

第三章 夢の子ども

トロイのヘレンをめくって

第一章 トロイのヘレンを知っていますか？

第二章 私のために戦うな

第三章 受身の愛

永田洋子と私

第一章 闇の中へ

第二章 授業報告「尺には尺を」

あとがき

附録 細い通路

尚、本書のあとがきにも触れられているが、著者の『江戸の女、いまの女』（葦書房）『動物登場』（弦書房）も併せて読んでみると、より著者の価値観に深く触れることができる。

（平成十八年十二月 弦書房 A版 三〇四頁 一五〇〇円）

後藤昭雄 著

『本朝文粹抄』

本書は、雑誌『アジア遊学』に、二〇〇二年七月から二〇〇三年九月まで、「本朝文粹抄」と題して十二回に渡って掲載された註釈の内、十一回分を纏めたものである。『本朝文粹』には、平安朝期に作られた漢文四三二作品が収められて

おり、本書は、その内の十一作品を註釈する。

本朝文粹概説

第一章 清慎公の先帝の奉為に諷誦を修する文（菅原文時）

文時

第二章 右近中将宣方の為の四十九日の願文（大江匡衡）

衡

第三章 遊女を見る詩の序（大江以言）

第四章 宇多院の河原院左大臣の為に没後諷誦を修する文（紀在昌）

る文（紀在昌）

第五章 河原院の賦（源順）

第六章 河原院に山晴れて秋望多しを賦す詩の序（藤原惟成）

原惟成

第七章 学生藤原有章の讚（菅原文時）

第八章 老閑行（菅原文時）

第九章 弁官・左右衛門権佐・大学頭等を申す奏状（大江匡衡）

（大江匡衡）

第十章 出雲権守藤原朝臣の為の帰郷を請ふ奏状（高階成忠）

階成忠

第十一章 右大臣を辞する表（菅原道真）

作者略伝

本朝文粹作品表

「本朝文粹概説」において「本朝文粹」のおおよそを紹介し、以下、第一章から第十一章に各一篇を宛てる。「作者略

伝」では本書でとりあげた八名を紹介し、合わせて、全四三二篇の「本朝文粹作品表」と索引を付す。

（平成十八年十二月 勉強出版 四六判 一九〇頁 二、九四〇円）

今西祐一郎 校注

『和歌職原鈔 付・版本 職原抄』

古記録、文書、漢文・和文を問わず、古文獻を通暁しようと試みる時、先ず身につけておかねばならないのは、官職についての知識である。その基本文獻として中世以来重宝されてきた官職書に、北畠親房の著した『職原抄』がある。しかしながら、この書は、『和歌職原鈔』の序に「官職の事は先彼職原抄を字知よりよろしきはなしとぞ。しかれども職原鈔ひとりよみがたし。」とあるように、万人向けとは成りがたい。そこで、この北畠親房著『職原抄』に基づいて、官職の概略を三十一文字の和歌一六五首に詠み込み、その要点を簡潔に示した書が、『和歌職原鈔』である。再び同書の序によれば、掲げられた一六五首の和歌は「唯これをこゝろえんとならば、先此和歌職原を暗ずるにあるのみ。…（中略）…蓋和歌職原は官職の次第を且々やまとことはにやはらげてみそひともじの哥に作り、こゝろへやすきやうのべ給へば、児童女もしりやすく、又おとなしき人も覚よくこそ侍るめれ。」

という。

本書は、この『和歌職原鈔』を翻刻・注釈し、加えて、版
本『職原抄』の翻刻を附す。目次は以下の通り。

和歌職原鈔

序

目録

四部配当和歌集

位階三十階和歌集

任官和歌集

位署書和歌集

僧官位和歌集

諸国大上中下之和歌集

注

版本 職原抄

解説

巻末に附された解説では、『和歌職原鈔』の位置付けのみならず、版本『職原抄』およびその関連書について触れ、近世において『職原抄』という書物がいかに重視されていたかを知ることができる。

(平成一九年一月 東洋文庫 758 B 6 判 二八八頁 二、八〇〇円)

中野三敏 著

『写楽』(中公新書)

著者の写楽に関する著述は、『諸家人名江戸方角分』覚え書(『近世の学芸』八木書店、昭和五十一年所収)、『諸家人名江戸方角分』考(『浮世絵芸術』四十九号、昭和五十一年所収)、中野三敏編『諸家人名江戸方角分』(近世風俗研究会、昭和五十二年)などが既に備わっている。本書は「東洲斎写楽」が阿波藩お抱えの能役者・斎藤十郎兵衛であることを一般読者にも分かりやすく、平明に説いたものである。本書の構成を次に挙げる。

第一章 江戸文化における「雅」と「俗」―写楽跡追跡前段

一、江戸に即して江戸を見る

二、伝統文化と新興文化

三、文化の身分制

第二章 すべては『浮世絵類考』に始まる

一、諸本考証次第

二、成立順序と写楽の記事

三、月々の『増補・浮世絵類考』三点セット

第三章 斎藤月岑という人

一、『江戸名所図会』から『武江年表』まで

二、江戸の町名主

三、三点セットのその後の運命

第四章 『江戸方角分』の出現

- 一、報告後、三十年間の経緯
- 二、江戸の人名録の沿革
- 三、『江戸方角分』考証

第五章 『江戸方角分』と写楽

- 一、新知見の数々
- 二、写楽はどのように記されているか
- 三、『八丁堀絵図』と関根正直博士の証言

第六章 大団円

- 一、齋藤十郎兵衛と与右衛門
- 二、なぜ実名が空欄とされたのか―身分というもの
- 三、さらなる問いかけに

補章 もう一人の写楽齋

写楽を誰に比定するかは諸説乱立した状況にあるが、それは近代、諸家の江戸時代に対する誤解と齋藤月岑『増補・浮世絵類考』の記述を軽視したことに起因するという。

筆者はまず、江戸時代が安定した身分制度の下、文化に「雅」と「俗」の別があつたことを示し、寛政の世に生きた写楽を江戸に即して理解することの重要性を説く。更に、第二―五章にかけて『増補・浮世絵類考』が如何に信頼できる資料であるかを『江戸方角分』などの文献資料に拠つて実証してゆく。博搜を極める筆者の緻密な実証によって、「齋藤十郎兵衛説」はここに揺るぎないものとなつたと言えよう。

(平成十九年二月 中央公論新社 新書版 二〇二頁 七六〇円)

中野三敏 編

『日本書誌学大系 41 (5)』

近代蔵書印譜 五編

本書は、明治以降の蔵書印を収録した、『近代蔵書印譜』の第五編。印影には印面所用者の略伝を付す。印影採集の書名も明記されており、所蔵者の集書傾向の一端を垣間見ることができる。印影は原寸大、原色刷りであり、原印とのつき合わせの便をはかる。掲載されている人物は以下の通り。

秋葉芳美 / 蘆田伊人 / 鮎沢信太郎 / 安藤菊二 / 池田屋清吉 / 池辺義象 / 石井光太郎 / 伊地知鉄男 / 市川左団次 / 市川任三 / 井上円了 / 今関天彭 / 岩本五一 / 植木枝盛 / 宇賀田為吉 / 大崎正次 / 大槻磐深 / 岡田甫 / 岡田希雄 / 岡谷繁実 / 岡本椿所 / 小田切春江 / 亀井孝 / 柄井川柳 / 川喜田半泥子 / 川瀬一馬 / 神田孝平 / 菊地三溪 / 木村豊次郎 / 栗田元次 / 栗本鋤雲 / 黒木勘蔵 / 河野広中 / 小林文七 / 近藤瓶城 / 西郷隆盛 / 佐野平六 / 篠木弘明 / 渋井清 / 島田翰 / 清水泰 / 末松謙澄 / 菅竹浦 / 杉浦梅潭 / 高橋誠一郎 / 高橋友鳳子 / 武島羽衣 / 竹本石亭 / 田中親美 / 田中初夫 / 太郎館季賢 / 近弥二郎 / 角田忠行 / 暉峻康隆 / 常盤雄五郎 / 徳田進 / 永井荷風 / 中根香亭 /

丹羽花南／沼田頼輔／羽田野敬雄／林学高／林美一／原胤昭
 ／平塚運一／福井久蔵／福島憲太郎／福羽美静／ボアソナー
 ド／本間耕曹／前田水穂／松平雪江／万里小路睦子／閻宮永
 好／円山大迂／三木佐助／三島中洲／水野稔／宮尾しげを／
 宮崎三昧／村松蘆洲／森槐南／森川竹磯／八木敬一／安田剛
 蔵／柳河春三／山上八郎／山口武美／山田椿庭／山根幸夫／
 山内長三／山本笑月／結城素明／吉田吉五郎／吉田幸一／リ
 チャードレイン／若井兼三郎／脇本楽之軒／和田維四郎／渡
 辺省亭

また巻末に、初編から四編までの重出を掲載する。

(平成十九年二月 青裳堂書店 A5判 一八頁 八、五 円)

福田智子 著

『平安中期私家集論』

歌人・伝本・表現

本書は、歌人・伝本・表現という多角的な視点から平安中
 期私家集を論じる。歌人編では、未詳の歌人の考察や家集の
 成立年代の再考。伝本編では、諸本の成立過程の想定、語の
 異同から窺える中世和歌への変貌、また詠歌から撰歌までの
 課程。表現編では、作歌法や『源氏物語』における和歌の採
 り入れ方など、広いテーマに渡っている。構成は以下のとおり。

序論 平安朝和歌史概観

私家集の史的展開と歌人・歌の家

第一章 「歌集」という語

第二章 私家集の社会的位置と歌人の身分

第三章 藤原公任の時代の私家集

第四章 勅撰集の変質と私家集

第五章 院政期の勅撰集編纂と私家集

第六章 平安最末期の私家集と御子左家

第七章 私家集の分類

付章 鎌倉初期伊勢在住歌人の見た大中臣家

本論 平安私家集の諸問題

『御裳濯和歌集』の編纂態度

歌人編

第一章 『能宣集』における未詳人物の一考察

第二章 藤原公任と東三条院註子四十賀屏風歌

第三章 平祐拳覚え書き

第四章 『為忠集』再考

伝本編

第五章 二月の子の日考

『能宣集』諸本の詞書をめぐって

第六章 平安朝和歌における「山」と「里」

「大原の山」から「大原の里へ」

第七章 藤原兼家六十賀和歌をめぐって

正保版歌仙歌集本『兼盛集』と

西本願寺本『能言集』

表編

第八章 藤原元真の作歌法

第九章 平祐拳の歌

第十章 「朧月夜にしくものぞなき」小考

『千里集』から『源氏物語』へ

(平成十九年二月 B5判 勉誠出版 三八〇頁 九、七六五円)

今井源衛 著

『今井源衛著作集 第九卷』

花山院と清少納言

著作集第九回配本の本巻は、前半に、昭和四三年七月に刊行され、今日なお、厳密な文献批判と綿密な実証にもとづく平安時代人物伝記研究の名著としての誉れ高い『花山院の生涯』を収める。後半には、「花山院と清少納言」と題して、各種講座や学術誌の求めに応じて折々に執筆された一〇篇の文章を集めた。

花山院の生涯

はしがき

1 出生と家系

2 生い立ち

3 即位時代

5 その和歌

結び

略年表

花山院と清少納言

花山院のこと

道綱母の愛憎

右大将道綱の母

紫式部と清少納言

枕草子の美意識と体験

巻末に初出一覧と古賀典子氏による解説を付す。

(平成一九年三月 笠間書院 A5判 三五九頁 一四、〇〇〇円)

今西祐一郎 著

『蜻蛉日記覚書』

本書は、著者が長年にわたって各誌に発表した研究成果を取り纏めたものである。構成は以下の通りである。

『蜻蛉日記』のすがた

一 『蜻蛉日記』の誕生

二 『蜻蛉日記』序跋考

三 『蜻蛉日記』の役目

4 退位時代

関係系図

花山院と公任

道綱母の氣質

清少納言の時代

枕草子の特質

枕草子の享受

四 『蜻蛉日記』から『源氏物語』へ

五 与謝野晶子と『蜻蛉日記』

六 近代『蜻蛉日記』研究の黎明

『蜻蛉日記』のごとば

七 「なげきつつひとりぬる夜の明くるま」考

八 「おなじぬれ」・「いとなき手」考

九 「むかしすぎことせし人」考

十 「日暮れ」考

十一 「とりつくるひかゝはる」考

十二 「よものものがたり」考

十三 「大嘗会のけみ」考

十四 「のたちからし」考

十五 「あなはら〜」考

「『蜻蛉日記』のすがた」では、『蜻蛉日記』の形成過程において、成立前後の他作品との影響関係について、又、この作品の持つ性格および役目について詳しく考察されている。「『蜻蛉日記』のごとば」では、転々書写の間に蒙った近世以降の本文について、平安時代の言語意識に則しながら、既成の枠組みを超えた斬新な改訂案を呈示する。

(平成十九年三月 岩波書店 A5判 二八六頁 六、六〇〇円)

須田千里・松本常彦 校注

『明治実録集』

(新日本古典文学大系 明治編13)

本書は明治期に編纂された実録三作品を収める。書名と校注者は以下の通り。

染崎延房輯 『近世紀聞』(抄) 須田千里

篠田仙果 『鹿児島戦争記』 松本常彦

渡辺綱 『明治奇獄 掃魔の曙』 松本常彦

また、補注と以下二編の解説を付す。

『近世紀聞』における実録・歴史・文学(須田千里)

明治実録の二例(松本常彦)

『近世紀聞』はペリー来航から西南戦争までを扱った通俗明治維新史であり、近世実録と比して実学尊重の傾向が顕著に認められる作品である。

松本氏担当の『鹿児島戦争記』ならびに『明治奇獄 掃魔の曙』はそれぞれ西南戦争と相馬事件を題材にした作品である。「鹿児島戦争記」に代表される『鹿児島実録』の多くは当時の風説や新聞記事からの参照によって成立する。その形式は新聞の「雑報」欄を想起させるが、編纂作業を経て冊子化することで、日々読み捨てられる「雑報」欄の概略としての一面を備える。さらに絵の挿入や「」印の消失などによって、「雑報」欄の形式から離れ「物語」へと接近していく。

付録として『明治奇獄 掃魔の曙』続編の全文と『近世紀
聞』『鹿兒島戦争記』に関連する地図と人名譜を収録。
(平成十九年三月 岩波書店 A5判 六一七頁 六、五二〇円)

中野三敏 著

『江戸狂者伝』

本書は「狂」や「畸」をキーワードに十八世紀近世思想史
の再構築に力を注いできた筆者の江戸中期の人物伝を集めて
一書と為したものである。目次は以下の通り。

序 水田紀久

狂者論 雅俗・文人・狂者

第一 残口任誕 神道 (増穂残口)

第二 志道破礼 狂講 (深井志道軒)

第三 百菴簡傲 連俳 (寺町百菴)

第四 大我狂簡 浄土 (釈大我)

第五 草廬昼錦 詩文 (龍草廬)

第六 蘭陵喜雨 曹洞 (釈蘭陵)

第七 蘇門狂狷 三教 (服部蘇門)

第八 文坡仙癖 神仙 (大江文坡)

第九 天愚自大 経世 (天愚孔平)

第十 土卵風流 遊俳 (富士卵)

第十一 龜齡惑溺 挿花 (龜齡軒斗遠)

第十二 秋園立身 絵師 (斎藤秋園)

徂徠学による「道の外在化」を批判するために取り入れら
れた陽明学によって、近世思想界は新たな動向を見せた。そ
れをよく反映するのが「畸人」や「狂者」の出現である。
「畸人」とは俗人には奇人変人に見えるが、天にかなった理
想的な人物を指し、「狂者」とは進取の精神に富み、志も高
く、言う事も大きい、行動に度はずれた所があつて、バラ
ンスがとれない人物を指す。特に「狂者」は「自己の内心に
包懐する理想の実現を願つて、熱心且つ雄弁にそれを語り、
その為にはどれほど偏頗奇矯と思われる行動も敢て辞さない
人物」であつた。彼らは、個人の内的価値を絶対的に評価し
ようという陽明学の思想を吸収しており、結果として儒教的
倫理観を基盤とする「私」の肯定にまでつながつた。筆者が
十八世紀を江戸時代の成熟期とする所以である。
時代精神を代表した十二名の狂者たちの営みを子細に検討
した本書は、十八世紀の思想及び文学を理解する上で大いに
助けとなるだろう。

尚、巻末に人名索引と書名索引を付す。

(平成十九年三月 中央公論新社 A5判 五五五頁 八、八〇〇円)

鈴木健一・進藤康子・久保田啓一 校注

『布留散東・はちすの露』

草径集・志濃夫廻舎歌集

『和歌文学大系』第七十四巻にあたる本書は、江戸後期の三歌人、良寛・大隈言道・橘曙覧の家集である。書名と校注者は以下の通り。

布留散東 鈴木健一

はちすの露 鈴木健一

草径集 進藤康子

志濃夫廻舎歌集 久保田啓一

巻末には補注、それぞれの生涯と歌論についての解説、四集共通の人名一覧・地名一覧・初句索引を付す。

『布留散東』『はちすの露』は良寛の家集であり、前者は自撰、後者は貞心尼撰である。『草径集』は大隈言道の家集、『志濃夫廻舎歌集』は橘曙覧の家集である。これら三歌人は従来、表現の平明さ・率直さ・非歌語の使用などの特異性にばかり目が向けられ、伝統に縛られない歌人、生得の歌人という評価が成されてきた。しかし近年ではそのような見方を離れて、特異性よりも伝統性、同時代性を見出だす方向に研究が向かっている。本書も同様の注釈方針を共通して持つ。それは具体的には、一語一語の綿密な検討、典故の指摘、稿本との比較などに現れている。その詳細な注は、三歌人の研

究において新たなページを開くものと言えよう。

(平成十九年四月 明治書院 A5判 五〇六頁 一三、六五〇円)